おおさき
今昔物語
大崎・このまちの ルーツを訪ねて
その3

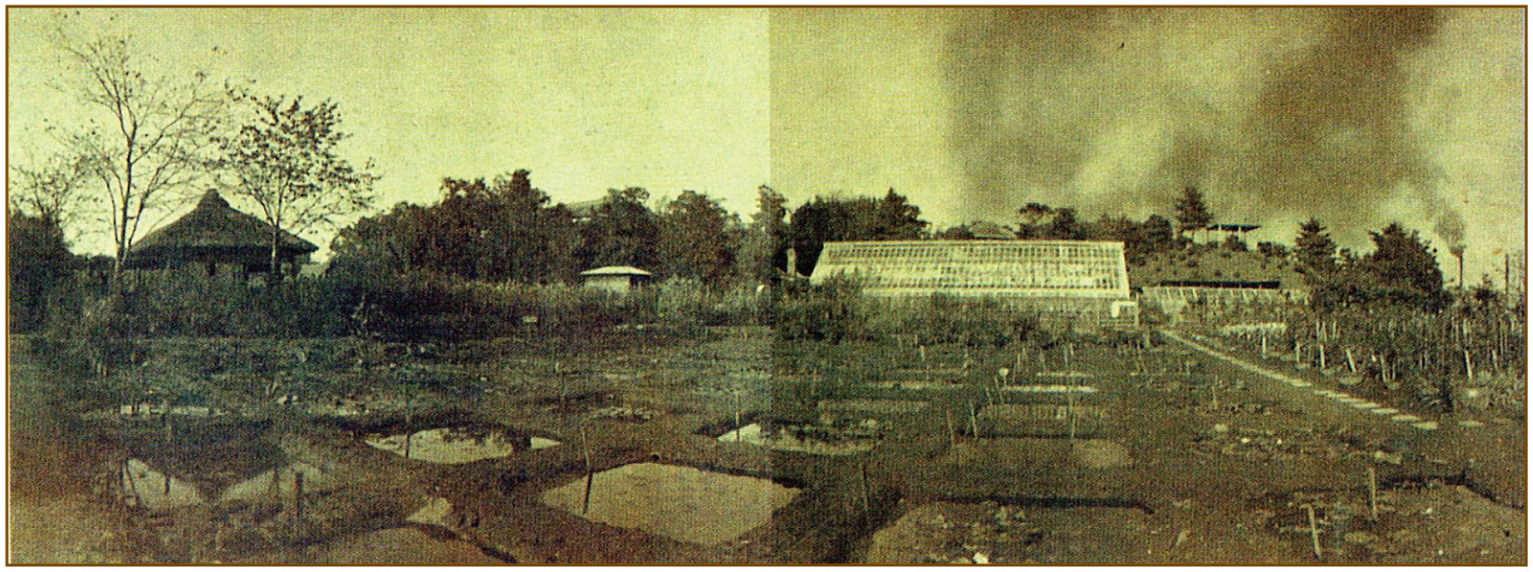
大崎は、ワシントンの桜と縁のある一大植物園があったまち。

私達のまち「大崎」の歴史の中に埋もれた興味深い 事柄や、ゆかりのストーリーを訪ねる「大崎今昔物語」。
過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNAの一端が、少しでも明らかになればと願い、
一話完結のシリーズとして取り上げていきます。その第三話は、
あの“ワシントンの桜”に縁のある一大植物園が大崎に広がっていた話。植物栽培の地としてあった大崎と、そこに生きた“大崎賢人”を訪ねます。

明治末期、ワシントンの桜の寄贈へ、苗木の選別で技術貢献した洋花栽培の先覚者、河瀬春太郎氏。氏が大崎に営む一万坪もの植物園「妙華園」は、向島百花園をしのぐ東京名所でもありました。

国土地理院刊 明治42年測量旧版地図

「妙華園」の温室で栽培された西洋植物などの花々は銀座などの当時最先端の街で売られたほか、地方の園芸家の熱心な要望に応えた通信販売も行われていました。


(写真上)肥沃な土壌が広がる三ツ木村と呼ばれた地に、のどかな佇まいを見せる「妙華園」。品川用水の支流の小川を水源とする灌漑池により、希少な水性植物などが栽培されました。

(写真左)可憐な西洋植物や遊園施設が当時の人々の関心を集め、「妙華園」は明治・大正時代の“フラワー・テーマパーク”として評判に。

池や温室、運動場、小動物園や売店もあった園芸の一大テーマパーク「妙華園」。

かつて三ツ木村や苗木村と呼ばれていた地(現在の西品川一二丁目)に1万坪もの花畑が広がり、そこでは水性植物を始めスイレンやバラ、ランなどの当時珍しかった西洋植物が栽培されると共に、小動物園などの遊園施設も備えて多くの人々を集めていた、という今ではあまり想像もできない歴史が、かつての大崎には存在していました。

「妙華園」と呼ばれたその植物園は、一時は向島百花園をもしのぐ東京の名所として知られたほどで、それは、当時のこの環境がメロンを特産品として栽培するほど園芸に適した地であったことや、園主・河瀬春太郎氏の高度な園芸ノウハウと見識の豊かさを物語るものでした。

広大な花畑が広がる「妙華園」

河瀬春太郎氏は、各県の知事を歴任した名士、河瀬秀治氏の長男として明治5年に出生。その後、米国で洋花園芸の技術を習得し、明治28年、氏が住むこの地に「妙華園」を開設しています。大正元年に植樹祭が催されたワシントン(ポトマック河畔)への桜の寄贈に際しては、氏の園芸技術が当時の東京市長・尾崎行雄に評価され、寄贈する桜苗木選別の重責を任されたのでした。

史実が伝える植物ユートピアとしての大崎。

四季折々の花々に彩られ、周辺の小学校からも遠足で訪れる名所となった「妙華園」も、やがて、大崎地域の工業化に伴う周囲への工場進出の影響で、植物の生産に適さない環境となったことから大正10年に閉園。敷地の大部分を当時の鉄道省へ売却しています。残った敷地に昭和40年代まで営んでいた苗木店としてのその姿も今はなく、史実のみが貴重な植物のユートピアがかつて大崎にあったことを伝えています。そこには、時の変遷の中で姿を変えていった郷土大崎の、緑豊かな一つの時代の素顔を見つけることができます。

園内で栽培された花々の中でも、スイレンは特に大人気に

「妙華園」は、その名の由来とも言われる妙光寺に隣接して存在。但し今ではもう当時の面影は見当たりません。

妙華園があった辺りの景観

目印となる妙光寺

同上、国際自動車建物

■参考資料:グラフしながわ／品川区立品川歴史館／他